

唐代六言詩歌としての王維〈田園樂七首〉について

井 口 博 文

一 序 論

〔一〕問題

中國文學史における六言詩歌の存在感は、五言や七言の作品と比較すれば、はるかに希薄であった。そのため、従來の先行研究では、特定の作品を六言詩歌とした要因が、充分には検討されてこなかったといつてよい。しかしながら、五言でも七言でもない齊言詩として、六言詩歌の獨自性は無視できな

きない。そこで、本稿では、六言詩歌の代表作である〔盛唐〕王維〔七〇一〜七六二〕の〈田園樂七首〉を検討してみる。同作品の〈序〉と目される文章としては、宋蜀本の題下に「六言走筆立成」〔六言。筆を走らせ立ちどころに成る〕という文句があ

る。しかし、この〈序〉は、眞僞が不明なため、通行書では注記されるにとどまっている。そして、〈序〉が眞であれ僞であれ、ある作品が、「作者」として主觀的にみれば偶然の結果にすぎないとしても、「讀者」として客觀的にみるならば、なんらかの必然性を指摘できるはずである。

したがって、本稿では、「偶然」によって説明を放棄せず、對象作品の「六言」「連作」という二點の特徴を、できるだけ合理的に説明してみたい。

〔二〕王維〈田園樂七首〉

本稿では、作品の本文として文獻④《王維集校注》を採用し、以下に全首を掲載しておく。なお、二首で重複している文字には傍線、三首で重複している文字には二重傍線をつけ

てあり、【附表】にもまとめである。

- 〈其一〉 出入千門萬戶 經過北里南隣
 蹀躞鳴珂有底 崆峒散髮何人
- 〈其二〉 再見封侯萬戶 立談賜璧一雙
 詎勝耦耕南畝 何如高臥東窓
- 〈其三〉 採菱渡頭風急 策杖村西日斜
 杏樹壇邊漁父 桃花源里人家
- 〈其四〉 萋萋芳草春綠 落落長松夏寒
 牛羊自歸村巷 童稚不識衣冠
- 〈其五〉 山下孤烟遠村 天邊獨樹高原
 一瓢顏回陋巷 五柳先生對門
- 〈其六〉 桃紅復含宿雨 柳綠更帶春烟
 花落家僮未掃 鶯啼山客猶眠
- 〈其七〉 酌酒會臨泉水 抱琴好倚長松
 南園露葵朝折 東舍黃梁夜舂

(三) 先行研究

本稿の對象作品である王維〈田園樂七首〉の關連文獻については、以下の最適箇所で言及する。本節では、本誌の前

唐代六言詩歌としての王維〈田園樂七首〉について(井口)

號に論文「唐代六言絶句の定型性について」を發表後、あらたによむことのできた三點の研究成果について、簡単に紹介し、批判しておく。

(一) 文獻③〈論六言律詩的格律〉

同論文は、近世・最近世の作品をふくむ合計千四十首の六言詩歌を對象にしていて、非常に廣範かつ有益である。ただし、以下の三點は、非常におしまれる部分である。

第一に、六言詩歌の全作品を對象としてはいないにもかかわらず、ことなる時代の作品を、特に區別せずにとまとめて論じているのは、いささか粗雑であろう。第二に、具體的な判斷基準が例示されていないままに、計量の結果が提示されているので、客觀的な檢證がむずかしくなっている。第三に、おそらくは編集上の不備のため、最後尾が不掲載のまま、文字どおり中途半端でおわってしまっている。

(二) 文獻⑤「中唐前期の六言詩」

中唐期・大曆年間「七六六七七九」の〈憶長安十二詠〉は、會稽を中心とする地方詩人十名が共同製作した、六言を基調とする雜言七句連作詩である。同論文「六、憶長安十二詠」と包括の「顧著作宅賦詩」では、同作品を素材にして、「……六言詩は隱逸を表現するものと意識されてきた。し

かし、ここではその内容は、隱逸とは對立するはずの長安での生活自體を隱逸の理想郷と同一視するものに變化してきている。「第十一頁」と指摘してから、王維が〈田園樂七首〉をつくった目的を考察している「後述」。

(二) 文獻⑥『唐詩』「附章 唐詩の韻文形式 (3) 声律」 同節には、「……つまり六言では「二六對」を無視するか、「粘法」を無視するか(失粘)、いずれにせよ規則違反にならないを得ない。……もともと韻文の基本原則と矛盾するといふ詩型が、定型詩として安定した地位を得ることができなかったのは當然といわねばなるまい」「第三百三十二頁」という指摘がある。ただし、「粘法」についてならばともかく、七言詩に固有の韻律である「二六對」をそのまま六言詩歌に適用することの可否は、本誌の前號で発表した論文「唐代六言絶句の定型性について」でも決着しなかった問題である。したがって、上記引用文の妥當性は、絶對確實とはいきれない。

二 本論 I : 六言

(一) 問題

作者である王維が、〈田園樂七首〉を六言絶句としたこと

には、なんらかの必然性があつたはずである。ところで、「六言」という特徴を検討するには、作者・内容の共通する五言詩や七言詩との比較が、より一般的な方法であろう。しかし、本稿では、もっとも著名な〈其六〉を人爲的に變形して原作と比較する、實驗的な方法をあえて採用する。ただし、ここでは、韻字・對句は變更せず、韻律も調整しない、暫定的な變形にとどめておく。

(二) 王維〈田園樂七首・其六〉の變形例

(一) 〈四言〉「原作の前二句から第三・五字、後二句から第三・四字を削除」

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 桃紅含雨 | 桃は紅 <small>ももはくれない</small> にして 雨 <small>あめ</small> を含み |
| 2 | 柳綠帶烟 | 柳は綠 <small>やなぎはみどり</small> にして 烟 <small>けり</small> を帶ぶ |
| 3 | 花落未掃 | 花落 <small>はなおち</small> ちて 未だ掃 <small>は</small> かかず |
| 4 | 鶯啼猶眠 | 鶯 <small>うぐいす</small> 啼 <small>な</small> きて 猶 <small>なほ</small> お眠 <small>ね</small> る |

(二) 〈五言〉「原作の各句から第三字を削除」

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 桃紅含宿雨 | 桃は紅 <small>ももはくれない</small> にして 宿雨 <small>しゆくう</small> を含み |
| 2 | 柳綠帶春烟 | 柳は綠 <small>やなぎはみどり</small> にして 春烟 <small>しゅんえん</small> を帶ぶ |
| 3 | 花落僮未掃 | 花落 <small>はなおち</small> ちて 僮未 <small>どういまだ</small> 掃 <small>は</small> かかず |

4 鶯啼客猶眠 鶯啼きて 客猶お眠る

(三) 〈六言〉〔原作〕

1 桃紅復含宿雨 桃は紅にして 復た宿雨を含み
 2 柳綠更帶春烟 柳は綠にして 更に春烟を帶ぶ
 3 花落家僮未掃 花落ちて 家僮未だ掃かず
 4 鶯啼山客猶眠 鶯啼きて 山客猶お眠る

(四) 〈七言〉〔原作に第六字を追加〕

1 桃紅復含宿夜雨 桃は紅にして 復た宿夜の雨を含み
 2 柳綠更帶春日烟 柳は綠にして 更に春日の烟を帶ぶ
 3 花落家僮未清掃 花落ちて 家僮未だ清掃せず
 4 鶯啼山客猶睡眠 鶯啼きて 山客猶お睡眠す

(二) 考察

それぞれの變形例を比較すると、以下の諸點を指摘できる。

第一に、六言の作品を五言や七言につくりかえることは、

唐代六言詩歌としての王維〈田園樂七首〉について（井口）

平仄の調整をのぞけば、それほど困難ではない。また、原作が六言であることを特に前提としなければ、それぞれの變形例に對する違和感は、かなり小さい。ということとは、六言形式の採用が、かなり意圖的であつたとかんがえられよう。

第二に、六言の原作と印象がもっとも近似しているのは、〈四言〉である。〈四言〉も〈六言〉の原作も、休音がなく、〈四六文〉の一部分と同様の構成をとっている。この點で、〈四言〉は、〈五言〉〈七言〉と比較して、言數の差は最大であるにもかかわらず、變形への違和感は最小である。したがって、六言詩歌を五言と七言の中間とする單純な位置づけは不適當であらう。なお、〈四言〉は、「天地玄黃、宇宙洪荒」〔天地は玄黃たり、宇宙は洪荒たり〕ではじめる《千字文》をも想起させる。

第三に、六言の特徴は、あきらかに「重厚性」よりも「輕快性」である。そのため、洗練が過剰になりやすく、新鮮味と「あきられやすさ」とが共存することになる。

第四に、全對格の五言詩や七言詩は、單獨では律詩の第二・三聯に近似しているので、前後に散句がない分だけ、不安定に感じられる。ましてや、七首連作すべてが全對格であるとすると、「排律」に近似するにとどまらず、むしろまっ

たく別の文體であるかの様な錯覺すら生じるほどである。

第五に、偶數言の絶句は、作品數そのものが少量であるため、五言や七言の絶句とくらべて、全對格が強調されにくい。したがって、王維が六言を採用した目的が、全對格の自然な適用にあったという可能性もある。

三 本論Ⅱ：連作

(一) 七首

作者である王維は、「七」という數字に、特定の意味を付與したのであるうか。たとえば、「七」の最初期の作品には、《楚辭》に「前漢」東方朔の《七諫》がある。

あるいは、王維が科擧の對策として習熟していた《文選》には、「七」に關連する以下の詩文が収録されている。

第一に「詩」としては、卷二十三に、本來は七首連作であったともかんがえられている《七哀詩》が採録されている。《田園樂七首》とは、「七」が共通し、「哀」と「樂」とが對照をなしている。そのなかでも特に、「西京亂無象、豺虎方遘患」〔西京 亂れて象なく、豺虎 方に患を遘す〕ではじまる〔後漢〕王粲の同題作品は、戰亂による都市の崩壊をえがいている點で、「田園の平和」にも反對である。

第二に「文」としては、卷三十四・三十五に、文體として《七》があり、〔後漢〕枚乘の《七發》などが採録されている。《七》は、問答を反復して君主を説得する構成をなしている。

そのほか、《文選》以外の作品にも、たとえば《全晉文》卷百四十所收の〔東晉〕湛方生《七歡》などがあり、このばあいは「歡」と「樂」も共通している。

この様に、「七首」は、「名數」を重視する傳統に影響された結果であるのかもしれない。ただし、本稿で個々の對應關係をくわしく検討する餘裕はないため、蓋然性を指摘するにとどめておく。

(二) 構成

(一) 問題

本節では、連作を構成する七首の關係性を検討する。一般に、「連作」では、各篇の獨自性を發揮しながら、同時に一首ではおさまりきらない多様な内容を表現できる。その點が、ほぼ同一の分量を表現できる「換韻の長篇」作品との差異である。ところで、王維《田園樂七首》は、「我所思兮在○○」「我の思う所は○○に在り」ではじまる〔後漢〕張衡

〈四愁詩〉と同様の「かぞえうた」でも、あるいは単純な「よせあつめ」でもない。

(二) 實態

たとえば、作品内部の時間が「春夏秋冬」や「あさ↓ひる↓よる」といった時系列にあれば、全體の首尾一貫性・脈絡は自明であることになる。しかし、対象作品は、四季や一日の順序にはなっていないので、七首の構成は、以下のとおり、三部にわけて理解しておくのがよさそうである。

第一に、「序論」に相當する〈其一〉〈其二〉では、それぞれ第一句の「萬戸」が象徴する俗世間を否定的に評價している。

第二に、「本論」に相當する〈其三〉〜〈其五〉では、「村」の敍景が中心になっている。

第三に、「結論」に相當する〈其六〉〈其七〉では、一日の生活を描寫している。

(三) 先例

本作品と同様の「六言・連作」詩には、〔初唐〕張説の〈舞馬詞六首〉がある。しかし、同作品は、宮廷儀式の描寫に終始している。

これも本作品と同様の「田園・連作」詩には、陶潛の五言

唐代六言詩歌としての王維〈田園樂七首〉について（井口）

詩〈歸園田居五首〉がある。同作品について、〔明〕黃文煥《陶詩析義》卷二には、「…前三首以入俗之苦、形歸居之樂。

此從田園外回頭也。後二首以隣里之死、形獨遊之歡。此從田園中再加鞭也。」〔…前三首は、俗に入るの苦を以て、歸居の樂しみを形どる。此れ田園の外より頭を回らず也。後二首は、隣里の死を以て、獨遊の歡びを形どる。此れ田園の中より再び鞭を加うる也。〕とある。王維〈田園樂七首〉が同作品の題材と構成に影響された蓋然性は、たかいであろう。

(四) 作者の實生活との關係

なお、〈其六〉〈其七〉について、文獻①『王維』には、「桃紅復含宿雨とは……新婚の夫婦の、夜だけで足りずに、朝のねざめにまた雲雨をたちこめさせるのを、桃と柳にかこつけて、のろけているのである。……酌酒抱琴もまたさしむかいでさしつさされつ、琴瑟相和するさまをうたうのだ」〔第百九十四〜五頁〕と指摘している。

同説にしたがうと、兩首は、作者自身の家庭生活を描寫していることになる。しかし、あえて二名以上の主人公を想定する必要はないのではないか。というのは、兩首の主人公を「山客」ひとりとみなし、たとえば「桃紅復含宿雨」という詩句を單純な敍景とみなすことに、なんらの問題もないか

らである。同説は、作品内容と作者の實生活とを強引に直結したため、不自然なものになってしまったのであろう。

(三) 制作の意圖

ここでは、「連作」という觀點から、作者の意圖を推察してみる。

たとえば、文獻⑤「中唐前期の六言詩」は、本稿の第一章(二)で引用した箇所につづけて、「逆にいえば、六言詩の直接の源流である「田園樂」も、實は「憶長安十二詠」や包佶の詩の内容と同じように中央政界での官吏としての榮達を求める心情の裏返ししの表現であつたとする見方をとることも可能である」〔第十二頁〕と指摘している。

これは、王維〈田園樂七首〉の制作を、みたされぬ羨望が屈折した結果の「代償行爲」とみなす解釋であり、俗世間を直接にとりあげている〈其一〉〈其二〉に限定すれば、妥當であろう。しかしながら、すでに俗世間を問題としていない〈其三〉〜〈其七〉については、むしろ不適當といえるであらう。

それならば、七首連作の重點は、前二首と後五首と、どちらにあるのか。一般に、二者間の格差を強調するときには、

否定したい「たてまえ」をより簡略に前置し、肯定したい眞意をより詳細に後置する傾向がある。さらに、本作品が、前述した陶潛〈歸園田居五首〉の構成をも模倣しているとする、〈其一〉〈其二〉は、むしろ田園生活を正當化する口實めいてすらいる。そうすると、作者の眞意は、決して「出世の不如意」という不満足感ではなく、やはり、詩題のとおり「田園生活」の満足感にあるのではないか。

(四) 〈其六〉の典型性と異質性

連作七首のうちでもっとも著名なのは〈其六〉であり、選集類にも單獨で選出されていることがおおい。その一因は、作爲的ともいえるほどの典型性にある。たとえば、〈其六〉の用語は、〈其三〉とは「桃・花・家」、〈其四〉とは「春・綠・落」、〈其五〉とは「山・烟・柳」という様に、合計九字が重複している。

ところで、〈其六〉は、《全唐詩・卷二百五十・皇甫冉》にも〈閑居〉という題名で収録されている。そのことをもって、文獻②『王維研究』には、「…がんらいこの一首は連作のうちになかったのかもしいないという疑いを抱かされる。そう思つて見れば、この詩は他の六首と異質であつて、同じ

構想では作られていず、この詩を省いた方が全體としてまとまりがよくなる。……單なる山居のある瞬間的な情趣を歌ったものにすぎない」〔第五百九十三頁〕という指摘がある。

たしかに、皇甫冉には、《萬首唐人絶句》にも三首の六言作品が収録されており、傾向として、自然詩・田園詩がおおい。さらには、〈其六〉だけ、作品内の時間が比較的にみじかいことも、ほかの六首にはない特徴である。その意味で、さきに引用した「連作のうちになかった」という想定も、ある程度は當然のものといえよう。

しかし、實際に〈其六〉だけが連作にはいっていないか。たとえば、書誌的な論拠は提示されていないし、作者を皇甫冉「七二四〜七六七」とする問題にしても、おそらくは生存時期・作風の共通性を原因とする單純な誤入であろう。また、中國の先行研究類では特に問題視されていないことも、否定的な材料である。さらに、「全六首」であったとすると、前述分の「七首」とした諸要因も、まったく無關係になってしまう。

なお、〈其六〉の典型性は、〈其三〉と〈其六〉の制作順序を推定する材料にはなりうる。たとえば、四首のうち最初に〈其六〉をつくったとすれば、それを分解するかたちで、あ

唐代六言詩歌としての王維〈田園樂七首〉について（井口）

とから〈其三〉と〈其五〉をつくったとみるべきであろう。あるいは、まったく逆に、〈其三〉と〈其五〉をつくってから、最後に〈其六〉を合成したのかも知れない。ただし、いずれが適當であるかは、不明である。

四 結 論

〔一〕まとめ

王維〈田園樂七首〉には、①六言 ②連作 ③全對格 ④田園詩という特徴がある。この四點がそなわっている作品は、文字どおり空前であり、おそらく絶後であった。そのため、六言詩歌の代表作として、最高の評價をうけてきていて、おおくの模倣作をうみだすことになった。

それでは、なぜ作者の王維は全七首を全對格としたのであろうか。一般に、對句では、前句が後句と意味的に一體化することによって、作品全體に輕快な印象をもたらす。ところで、「六言の詩歌」も、「七首の連作」も、「全對格の絶句」も、作例が少數である。作者は、これら三點の形式を同一作品に採用して、相乗効果の發揮をねらったのではないか。そうであるとすれば、本作品は、詩型の多様性を意欲的に追求した結果であるといえよう。

そして、全七首を全對格としたことは、「田園詩」という内容を強調することにもなっている。結果的に、文獻③〔論六言律詩的格律〕で「《田園樂》七首、首首全篇對仗、宛如七幅清新秀美的田園風景畫」〔田園樂七首〕は、全首が全對格であり、まるで七幅の清新で秀美な田園風景畫に類似している〕〔第十九頁〕などと指摘されているとおり、作品の「視覺化」をうみだしてゐる。

〔二〕方法上の問題

第二章〔二〕でこころみた原作の變形は、研究方法としては例外的であるかもしれない。しかしながら、創作の過程を、追體驗できないまでも推定する材料としては、ある程度まで客觀的に有效であつたとおもわれる。今後、たとえば、詩歌の音數律や、六言詩歌の韻律をあきらかにするばあい、研究方法の突破口となりうるのではないだろうか。さらには、逆方向の變形、すなわち五言や七言の作品を六言にしてしまうことも、同様に有効でありうる。しかし、それらの諸點については、可能性を示唆するにとどめておく。

【文獻】

- ① 『王維』 小林太市郎・原田憲雄〔著〕
一九六四 集英社・漢詩大系一〇
- ② 『王維研究』 入谷仙介〔著〕
一九七六 創文社・東洋學叢書
- ③ 〈論六言律詩的格律〉 林亦〔著〕
一九九六 《文學遺產》第一期
- ④ 《王維集校注》 陳鐵民〔校注〕
一九九七 中華書局・中國古典文學基本叢書
- ⑤ 「中唐前期の六言詩」 市川清〔著〕
一九九八 『中唐文學會報』
- ⑥ 『唐詩』 村上哲見〔著〕
一九九八 講談社・學術文庫一三五二

【附表】

用語	一	二	三	四	五	六	七
1 門	1				4		
2 萬戶	1	1					
4 南	2	3					3
5 何	4	4					
6 人	4		4				
7 一		2			3		
8 高		4			2		
9 東		4					4
10 村			2	3	1		
11 樹			3		2		
12 桃			4			1	
13 花			4			3	
14 家			4			3	
15 春				1		2	
16 綠				1		2	
17 落				2		3	
18 長松				2			2
20 巷				3	3		
21 山					1	4	
22 烟					1	2	
23 柳					4	2	
計 字數	6	7	6	8	9	9	4

※わく内の數字「1～4」は「第幾句」をさす。

※※〈其四〉の「落」は二回分。